

卓越大学院プログラム 平成 30 年度採択プログラム事後評価について

令和 7 年 3 月
卓越大学院プログラム委員会

「卓越大学院プログラム」（以下「本事業」という。）は、新たな知の創造と活用を主導し、次代を牽引する価値を創造するとともに、社会的課題の解決に挑戦して、社会にイノベーションをもたらすことができる博士人材（高度な「知のプロフェッショナル」）を育成することを目的とする事業である。本事業では、構築された学位プログラムが、補助期間終了後も大学の学内外資源等により持続的に運営され、本事業の目的に沿った人材が継続的に輩出されるよう、各大学における大学院の教育改革及びシステム改革に取り組む期間として 7 年間にわたって支援することとしている。

本事業は、文部科学省において平成 30 年度から支援が開始され、プログラムの審査・評価を担当する卓越大学院プログラム委員会において、令和 2 年度までに 140 件の申請の中から合計 30 プログラムが採択されている。

事後評価は、各採択プログラムにおいて、中間評価結果を踏まえた対応が適切に行われ、本事業の目的が達成されたかについて評価するとともに、その結果を各大学に示し適切な助言を行うことにより、補助期間終了後の学位プログラムの定着等の大学院教育の水準の向上に資すること、各採択プログラムの成果等を明らかにし、社会に公表することにより、大学や研究機関、民間企業、公的機関等のそれぞれのセクターにおける博士号取得者の活躍を促進することを目的とし、評価要項に基づいて、採択後 7 年目に行うものである。

平成 30 年度採択プログラムの事後評価は、独立行政法人日本学術振興会において、平成 30 年度に採択された 15 プログラムから事後評価調書等の各種調書の提出を受け、プログラム委員会の下に設置されている審査・評価部会において、現時点での成果等を確認し、当初目的がどの程度達成できたかについて専門的観点から実施した。

これらの結果に基づき、令和 7 年 3 月 11 日の本委員会において、審査・評価部会における総括評価の結果等、事後評価結果をとりまとめた。

今後、各プログラムにおいては、公表された事後評価結果（総括評価・コメント）を基に、これまでの蓄積を踏まえ、より一層充実した取組を積み重ねるとともに、取組を通じ得られた経験と成果を、我が国の他の大学にも広く展開するよう、更なる工夫と尽力を期待する。

最後に、本プログラムにおいては、各採択プログラムにプログラムオフィサーを置き、採択プログラムに対する日常的な進捗状況の把握、相談、助言等の対応を行っていただいているが、本事後評価の実施に当たってもプログラムオフィサーに多大なご協力をいただいたことに感謝申し上げます。

事後評価結果の概要

事後評価を実施した平成30年度採択プログラム(13大学・15プログラム)の総括評価とプログラム全体を通じた所見、成果・課題等は以下のとおりである。

(1) 事後評価結果一覧

| 整理番号 | 大学名 | プログラム名称 | 総括評価 | (参考) 中間評価 |
|------|--------------------|---|------|-----------|
| 1801 | 北海道大学 | One Health フロンティア卓越大学院 | S | A |
| 1802 | 東北大学 | 未来型医療創造卓越大学院プログラム | A | A |
| 1803 | 東北大学 | 人工知能エレクトロニクス卓越大学院プログラム | A | A |
| 1804 | 筑波大学 | ヒューマニクス学位プログラム | S | S |
| 1805 | 東京大学 | 生命科学技術 国際卓越大学院プログラム | A | A |
| 1806 | 東京農工大学 | 「超スマート社会」を新産業創出とダイバーシティにより牽引する卓越リーダーの養成 | A | B |
| 1807 | 東京科学大学 (東京工業大学) | 「物質×情報=複素人材」育成を通じた持続可能社会の創造 | S | S |
| 1808 | 長岡技術科学大学 | グローバル超実践ルートテクノロジープログラム | S | S |
| 1809 | 名古屋大学 | トランスフォーマティブ化学生命融合研究大学院プログラム | S | A |
| 1810 | 名古屋大学 | 未来エレクトロニクス創成加速 DII 協働大学院プログラム | A | A |
| 1811 | 京都大学 | 先端光・電子デバイス創成学 | A | A |
| 1812 | 大阪大学 | 生命医科学の社会実装を推進する卓越人材の涵養 | S | S |
| 1813 | 広島大学 | ゲノム編集先端人材育成プログラム | A | A |
| 1814 | 長崎大学 | 世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム | A | A |
| 1815 | 早稲田大学 | パワー・エネルギー・プロフェッショナル育成プログラム | S | S |

(2) 総括評価の分布

| 評 価 | | 件 数 | 割 合 |
|-----|---|-----|-------|
| S | 計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。 | 7 | 46.7% |
| A | 計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。 | 8 | 53.3% |
| B | 概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。 | 0 | 0.0% |
| C | 計画に沿った取組が行われておらず、十分な成果が得られていると言えないことから、本事業の目的を達成できなかったと評価する。 | 0 | 0.0% |
| 計 | | 15 | |

全体的な状況を見ると、15プログラム中 7プログラム（46.7%）が「S：計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。」、8プログラム（53.3%）が「A：計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。」と評価され、全てのプログラムが順調に成果をあげたと評価されている。

(3) プログラム全体の状況

評価の分布を見ると、「S」評価（5件→7件）（2件増）、「A」評価（9件→8件）（1件減）、「B」評価（1件→0件）（1件減）となっており、個別のプログラムの総括評価の変化としては、総括評価が中間評価より高くなったプログラムは15プログラム中3プログラムあった。

これは中間評価結果やフォローアップにおける指摘事項を踏まえ、プログラムコーディネーターをはじめとするプログラム担当者等が一丸となり、より良い学位プログラムとなるよう改善に向けて尽力されたことによるものと考えられる。また、プログラム担当者、関係部局だけの取組に留まらず、学長のリーダーシップの下、全学を挙げた取り組みに発展させ、大学院改革につながるよう、継続性・発展性が確保されつつあることや、国内外の産学官民の各セクターからの連携・協力が得られたことが優れた成果につながり、評価向上に大きく寄与したと考えられる。

さらに、7年間という長期間にわたり担当プログラムに寄り添い、随時適切な相談や助言を行うとともに、プログラム及び学生の成長を見守り、叱咤激励いただいたPOの貢献は大きいと言える。部会への臨席や個々の採択プログラムに対するフォローアップの強化に向けた意見交換の場等を通じて認識の共有が図られ、部会とプログラム間の架け橋として、難しい立場で双方の理解の深化に大きな役割を果たした。これらのことから、PO等によるフォローアップを通じて、中間評価後に改めて本事業の趣旨が理解・浸透されたことも今回の総括評価の向上の一つの要因と考えられ、PO制度を含む本事業における評価・フォローアップのシステムが効果的に機能したことを示していると考えられる。

(4) プログラムごとの「取組や成果」・「課題とされた点」

今回事後評価を実施した15プログラムにおいては、それぞれ当該プログラムの目的に沿って、以下のような取組や成果、課題が見受けられた。

(ア)「卓越した学位プログラム、「知のプロフェッショナル」を養成する体制等の構築」については、

- ・若手教員を中心にコーチング技能研修を受けたファシリテーター教員によるきめ細かい指導や企業の第一線で活躍する特任教授によるメンターの取組を通じ、「知のプロフェッショナル」たる学生の育成が実現できている。
- ・指導教員以外の教員や企業、政府機関など学外者からの指導・助言を大半の学生が受けており、多様なプログラム担当教員・産官の協力者による指導が充実している。
- ・外部評価委員会からの助言を得てPDCAサイクルを機能させている。
- ・完全ダブルメンター制とリバーズメンター制により学内外の約100名のメンター教員によって効果的な研究指導を実践している。
- ・複数分野の審査員によるQEや英語での研究発表を含む修了審査など、高いレベルの質保証システムが確立されている。
- ・企業との連携により、地域のニーズに応えたルートテクノロジー開発や研究が大いに進展し社会実装された点は、卓越大学院の精神を実現している。
- ・プログラム担当教員や企業研究者による学生指導が実施されており、融合研究を軸に組織的かつ密接な指導体制が構築されている。
- ・研究+事業化（社会貢献）という在学中から大学院修了後のキャリアパスまで学生の視点を拡張する教育指導体制を推進している。
- ・知財戦略、市場調査、規制科学などを積極的にカリキュラムに組み込むなどして、人文社会科学系の融合研究への実質的な取組などを当初の想定を超えて進めた点は高く評価できる。

などの取組や成果が見られた。

一方、課題としては、

- ・履修生に占める留学生比率が高く、途上国等からのニーズが高いことの証左として評価しうるが、日本人学生と留学生とのバランスについては、一層の検討が求められる。
- ・長期間の実績は多いものの海外派遣件数が少ない点については、今後の改善が望まれる。
- ・直近の募集定員や履修生総数に対して学生数が大幅に充足していない現状は、学生受入れ開始の初年度に募集定員を大きく上回る人数を受け入れていたことの反動や分野の特性等を配慮しても憂慮する。
- ・インターンシップを含む留学経験をもつ学生や留学生数などが少ないことから、経済的支援も含めた国際競争力の向上のための環境整備に一層の工夫と尽力が必要である。

などの指摘を受けているプログラムが見られた。

(イ)「修了者の成長」については、

- ・学生自身による海外インターンシップや共同研究の申入れ、招へい者とのコンタクト等が行われるなど、自主的なグローバルなネットワーク形成の教育効果は評価できる。
- ・異なるコースの学生グループによる徹底的なブレインストーミングや各施設や企業でのインターンシップ等によって、学生自身が修了時に俯瞰力や独創力並びに高度な専門性に関して、様々な能力が向上したと実感している。

- ・修了者は俯瞰力や独創力並びに高度な専門性に関して様々な能力が向上したと感じており、9割以上の学生が担当教員のプログラムへの理解、教員間の協働、学生のプログラム参加への理解・支援等を高く評価している。
- ・卓越大学院の取り組みが共同研究の契機となった事例もあり、通常の博士課程では得られない幅広い経験や独創性を涵養する教育が進められている。
- ・学生が異分野との交流に新しい価値を見出し、ダイバーシティの教育を正しく受け、従来に比べ、俯瞰力や独創力、高度な専門性が向上している事例が数多く見られた。
- ・未来の社会課題を設定し、自身の研究や知識を社会に還元している点、また学会受賞数が想定以上となっていることは、高度な学生の研究成果が社会に認められたものとして評価できる。
- ・多くの修了者は、他の卓越大学院プログラム生との交流会に参加していて、大学を超えた交流を継続しており、修了者の成長の場作りにも様々な工夫が見られる。
- ・プログラム履修者と修了者の双方に対し、分野や立場を超えた多様な人的ネットワーク構築のための多面的な取組・支援が行われている。
- ・修了者の半数以上が民間企業に就職をしており、企業関係者からも本修了生に対して高い評価を得ており、プログラムの育成の成果が社会に認められたものとして評価できる。
- ・社会実装力と研究実践力双方において詳細で具体的なルーブリック評価によって学生の質向上が担保されている。
- ・プログラムの修了者を採用するために博士学生の採用制度を創設した会社が生まれるなど、卓越した人材輩出の成果が社会に認められたものとして大いに評価できる。

などの取組や成果が見られた。

一方、課題としては、

- ・コロナ禍の影響もあり、海外留学の実績が芳しくなかったことから、今後の国際的な経験や視野の獲得に向けた積極的な展開を期待したい。
- ・修了生ネットワークの構築や追跡調査が十分とは言えず、今後は修了生と在籍学生間の連携を強化する方策が求められる。

などの指摘を受けているプログラムが見られた。

(ウ)「キャリアパスの構築」については、

- ・文理融合型のカリキュラムが奏功し、医療系のプログラムとしては従来とは異なる民間企業への就職やコンサルティング系企業への就職等、新たなキャリアパスを構築できている。
- ・在学中でも就職を可能にする在学就職制度を博士課程学生の新たなキャリアパスとして導入している。
- ・プログラムの修了者と在学生から成る同窓会が組織されており、社会における修了者の活躍状況を長期にわたり把握していくことが期待される。
- ・独立した新しい基準での評価体制で、ポートフォリオシステムにより可視化して学生にフィードバックする仕組みは大変有効である。
- ・大学発のベンチャーにおいては起業数が全国2位になるなど、高度な知のプロフェッショナルが実践の場で力を発揮し、キャリアパスを形成していることは、注目に値する。
- ・連携機関の若手企業研究者との直接対話などが構築され、学生のキャリア育成のみならず企業研究者の育成にとってもよい関係を築いている。
- ・Joint Degree や海外インターンシップ制度を活用し、国立国際医療研究センターや官公庁、

NGO/NPO との連携によるネットワークが学生のキャリア形成に寄与している。

などの取組や成果が見られた。

一方、課題としては、

- ・インターンシップへのポジティブな評価は7割弱に留まっており、海外企業等も含めインターンシップ先を広げるなど学生の意欲を高める更なる工夫と改善が望まれる。
- ・企業や研究機関との交流を促進する全体会議や企業セミナーなど、多様な機会も提供されているが、修了生の進路情報の周知が不足している。
- ・定員に対し修了者数が少ないこと、また一定数の辞退者がいることや修了者アンケートの回収率が低いことから、大学と修了者とのネットワーク構築が弱い。
- ・インターンシップを含む留学経験をもつ学生や留学生数などが少ないことから、経済的支援も含めた国際競争力の向上のための環境整備に一層の工夫と尽力が必要である。
- ・研究機関に興味がある学生が多く、なかなか民間へのキャリアパスが開けないように見える。プログラムの中でキャリアパスの可能性を開拓する必要があるのではないか。

などの指摘を受けているプログラムが見られた。

(エ)「大学院全体への波及効果及び事業の継続・発展」については、

- ・純粋に教育のために産業界から経済的支援を受けることに成功しており、また産業界での博士学生の価値を向上することに本プログラムが大いに寄与したと評価できる。
- ・大学院のグッドプラクティスを学部カリキュラム全体まで展開する取組によって、新たな改革の形を実現できている。
- ・学位プログラム企画・運営・管理および産学連携に基づく大学院教育等を全学的な観点で推進する体制が組まれている。その中で、本プログラムの好事例や推進体制の強化等が図られている。さらに研究科や専攻を越えて学生の自主性のもとに履修ができ修了証が出せる大学院横断教育コースの設置も進められており、これは新たな学位プログラムの創設につながるものとして期待される。
- ・大学院改革が学部レベルにまで浸透し始めるなど、まさに全学的な改革になっている点は当初の予測を超えており、大いに評価できる。
- ・研究科再編や教育担当理事を中心とした改革推進体制の設置、5年一貫博士課程の設置検討等、本プログラムが大学院改革を牽引している。

などの取組や成果が見られた。

一方、課題としては、

- ・今回の取組のグッドプラクティスは何かをいま一度振り返り、学位プログラムを継続する中で、具体的な施策として大学院全体に展開することが望ましい。
- ・新学位プログラム開始・継続の最重要課題となる学生の獲得についてはその取組が学内、さらには学部内に閉じた取組に留まっているように見える。
- ・現履修生・修了生のプログラムによる成長や社会での活躍を発信する等、学生が実感できるプログラムの魅力の発信を通じ、学生獲得に向けたさらなる努力に期待したい。

などの指摘を受けているプログラムが見られた。

(5) 事後評価アンケート調査結果の概要

- 平成 30 年度に採択された 15 プログラムについて、令和 6 年 4 月 17 日（水）～5 月 24 日（金）の期間で事後評価アンケート調査を実施した。対象となる学生については、プログラムに選抜された学生（プログラムが独自に授与する学位又はプログラム修了証の授与対象者）のうち、現在も在籍している全学生（休学中の者を含む）とし、プログラム担当者については、令和 6 年 4 月 1 日時点で参画しているプログラム担当者（プログラムに属する学生の研究指導、学位審査等の質保証を担当し、あるいは履修支援、キャリア形成等を総括しプログラムの実施を責任ある立場で主体的に担う常勤又は非常勤の者。実施大学以外に所属するプログラム担当者も対象に含む。ただし、プログラム責任者・プログラムコーディネーターは除く）を対象とした。修了生については、プログラム参加学生（編入も含む）のうち、令和 6 年 3 月末までにプログラムを修了した全学生を対象とした。
- 回答者は全プログラム合計 2456 名（学生 1096 名、プログラム担当者 922 名、修了生 438 名）であり、回答率はプログラム学生 89.4%、担当者 87.8%、修了生 88.7%となった。
- 学生アンケート調査の集計結果からは、以下のような特徴が見られた。
 - ①プログラムへの参加動機
「通常の博士課程では得られない、幅広い知識や経験が得られる」を参加動機の一つとして選択した学生が最も多く（84.8%）、次に「経済的な支援が充実している」を選択した学生が多くなっている（81.6%）。
いずれも、「最も直接的な動機（単数回答）」として回答した割合もそれぞれ「通常の博士課程では得られない、幅広い知識や経験が得られる」が約 18.7%、「経済的な支援が充実している」が約 29.4%と、他と比較して高い割合となっている。なお、「最も直接的な動機（単数回答）」については、この二つに次いで約 12.3%の学生が「プログラムの目的と自分の目指す将来像が合っている」と回答している。
 - ②プログラムがなかった場合の最終学位
1096 名中 574 名（約 52.4%）の学生が「博士(今所属する大学と同じ研究科・専攻等)」と回答しており最も多くなっている。「修士(今所属する大学と同じ研究科・専攻等)」と回答した学生が二番目に多く、全 1096 名中 286 名（約 26.1%）となっている。
 - ③プログラムに対する感想
ほとんどの項目について評価は高く、特に「専門分野以外の幅広い知識や経験」「奨励金などの経済的支援」「専門分野以外の教員との出会い」については 80%以上、「他の専門分野の学生との交流」「議論することに対する自信をつけること」については 75%以上の学生が「非常に良い」又は「良い」と回答している。一方で、「インターンシップの機会」、「留学の機会」、「他大学の学生との交流」については「機会がなかった」や「どちらとも言えない」と回答した学生も一定数見られる。
 - ④プログラムで受けた指導
「研究室ローテーション」、「産学共同研究の場への参画」、「キャリアパス具体化のための情報提供」では、指導を「受けていない」と回答した学生も一定数見られるが、指導を受けた学生の回答を見ると、どの取組についても「有効」、「ある程度有効」の合計が 90%以上で有効性に対する評価は高くなっている。

⑤環境の整備と有効性

「学生のみでプロジェクト等を企画・運営する機会」について整備が「不十分」であるという回答や、「有効でない」または「あまり有効でない」という回答も見られるものの、全ての項目において「整備されている」且つ、「有効である」との評価が多数を占めている。

⑥経験の有無と有効性

国内外の研修・インターンシップ、留学、その他学外活動のほぼ全項目において、「これから参加」、「参加の予定はない」と回答した学生の数が「参加した」と回答した学生を上回っているが、実際に活動に参加した学生は、いずれの項目でも90%以上が「有効」又は「ある程度有効」と回答している。

⑦身に付いた能力

ほとんどの項目において、「非常に身に付いた」、又は「ある程度身に付いた」と回答した学生が80%を超えている。一方で、「企画立案、関係者との調整、統率する能力」、「高い国際性」、「チームのマネージメント力」については、「あまり身につけていない」または「身につけていない」と回答した学生も少なからず見られる。

⑧プログラムへの評価

「後輩にもこのプログラムを勧めたい」、「指導教員や研究室スタッフを含め、プログラムに参加していない教員等はプログラムの目的を理解し、あなたがプログラムに参加することに協力的である」、「学術研究だけではなく、企業や政府、国際機関などで活躍する人材を作り出す可能性が大きい」、「プログラムに参加する教員の間でプログラムについての理解が共有されている」、「多くの担当教員の協働によりプログラムが運営されている」全ての項目について、80%以上の学生が「非常にそう思う」又は「そう思う」と回答しており、特に、「後輩にもこのプログラムを勧めたい」については、半数以上の学生が「非常にそう思う」と回答している。

⑨プログラムの効果・負担

「所属研究室において、自分の専門的な研究を進めて、業績を上げられると考えている」「このプログラムによって自身の研究に新たな示唆・知見が得られた（得られそうである）」については、約90%が「非常にそう思う」又は「そう思う」と回答している。「所属研究室での指導と、このプログラムでの指導が過大な負担にならないように考慮されている」かどうかについても約80%の学生が肯定的に回答しているが、「修了後の進路に不安がない」かどうかについては肯定的な回答が65%程度となっており、学生によってややばらつきがある。

⑩修了後の進路

大学院入学時、アンケート回答時点、いずれも「民間企業に就職（研究者として）」、「大学（海外を含む）に研究者として就職」、「ポスドク（博士研究員）」、「その他公的研究機関（海外を含む）に研究者として就職」を選択した学生が多く、大学院入学時とアンケート回答時点で全体的な傾向に大きな差は見られない。既に進路が決定している場合の回答は「民間企業に就職（研究者として）」が最多となり、「起業」、「大学（海外を含む）に研究者として就職」が同数で続いている。これら3つの回答の合計は全体の60%以上となる。

⑪回答者の属性

男性が約70%、女性が約30%となっている。約55%が同じ大学の卒業生であるが、留学生（20.3%）

をはじめ他大学院を経験・卒業、社会人経験者等も一定数存在する。大学院入学後2年目以降に参加した学生も約40%見られた。また、約60%の学生の指導教員がプログラムに所属している。

⑫プログラム情報の獲得方法

プログラムをどのようにして知ったかについては、約47%が「大学で行われた説明会・シンポジウム等」を選択しており、「プログラム担当者の教員」（約40%）を挙げた学生も半数弱いる。「学内の友人・知人」、「プログラム担当者以外の教員」や、ホームページ・リーフレット等の広報媒体からプログラムを知ったという学生も一定数見られる。

○ プログラム担当者アンケート調査の結果からは、以下のような特徴が見られた。

①プログラムへの関与

令和5年度の実績においては、エフォート1割未満とする担当者が約63%となっており、1割以上2割未満とする担当者と合計すると、約85%がエフォート2割未満でプログラムに関与している。

②指導の内容

半数以上の担当者が「指導学生以外の学生への指導」、「メンターとしての授業外のサポート」、「を行っている」と回答している。

いずれの指導についても、その95%以上が「有効」又は「ある程度有効」と回答している。

③実施されたプログラムと整備された環境

「外国人、職業人など、通常の大学院では接触しにくい人との交流の機会」、「異分野の学生間で切磋琢磨できる環境」、「奨励金や授業料免除等大学からの金銭的支援」、「キャリアパス具体化のための情報提供」、「企業、政府機関など学外者からの指導」、の全てについて、70%以上が実施あるいは整備されていると回答しており、いずれも95%以上が「有効」又は「ある程度有効」と回答している。留学やインターンシップ等の学外活動の各項目における実施、整備状況については、「分からない」を選択したのも一定数いるが、実施している場合、いずれの取組についても95%以上が「有効」又は「ある程度有効」と回答している。

④プログラムの有効性

全ての能力について、プログラムが有効であるとの回答が多数を占めているが、特に「専門以外の分野の幅広い知識」、「自ら課題を発見し解決に挑む力」、「物事を俯瞰し本質を見抜く力」、「高度な専門的知識・研究能力」、「他者と協働する力」、「高い国際性」については、半数以上が「非常に有効」と回答している。

⑤運営・管理

「学内外へのプログラム内容や成果の広報が積極的に行われている」、「産業界、行政機関、NPO等によるプログラムへの参画と就職先に関する情報提供が行われている」、「コストを意識した運営がなされている」、「大学本部による関与・サポートを含めた連携する民間企業と「組織」対「組織」の連携・協力体制が構築されている」、について、85%以上が「非常にそう思う」、「そう思う」と回答している。

⑥プログラムに対する印象

プログラムに対して概ね肯定的な印象が多く、「優秀な社会人の博士学位の取得促進が行われている」を除く全ての項目において80%以上が「非常にそう思う」、「そう思う」と回答している。

⑦指導・支援の改善のための評価等の実施

「担当する一部の役割等において実施している」又は「担当する全ての役割等において実施している」が37.3%、「実施していない」の回答は62.7%となっている。

⑧学生への効果・負担

「このプログラムによって学生自身の研究に新たな示唆・知見が得られる（得られそうである）」、「プログラムに参画している学生は所属研究室において、自分の専門的な研究を進めて、業績を上げられると考えられる」については、「非常にそう思う」又は「そう思う」との回答が95%を超えている。一方で、「学生の将来の進路に不安がない」に対しては、「そう思わない」又は「全くそう思わない」との回答も一定数見られる。

⑨回答したプログラム担当者の属性

回答者の約64%が「当該大学院・参画研究科・専攻等」であった。本プログラムの学生に直接接する頻度は「日常的」（32.8%）が最も多くなっている。プログラム内では「個別学生の研究指導」を担当する者が約49%で最も多くなっている。

○ 修了生アンケート調査の集計結果からは、以下のような特徴が見られた。

①プログラムへの参加動機

「経済的な支援が充実している」を参加動機の一つとして選択した修了生が最も多く（84.9%）、次に「通常の博士課程では得られない、幅広い知識や経験が得られる」を選択した修了生が多くなっている（75.6%）。

いずれも、「最も直接的な動機（単数回答）」として回答した割合もそれぞれ「経済的な支援が充実している」が約39.3%、「通常の博士課程では得られない、幅広い知識や経験が得られる」が約19.4%と、他と比較して高い割合となっている。なお、「最も直接的な動機（単数回答）」については、この二つに次いで約8.4%の修了生が「大学や研究機関、民間企業、公的機関への就職など自分の将来の可能性が広がる」と回答している。

②プログラムへの参加動機がどの程度満たされたか

「留学や海外インターンシップなど、海外での経験が積める」「指導教員などの教員に勧められた（断ることができなかった）」を除く全項目で、「期待以上であった」「期待どおり」と回答した修了生が80%以上となっている。

③プログラムに対する感想

ほとんどの項目について評価は高く、特に「奨励金などの経済的支援」「専門分野以外の幅広い知識や経験」「他の専門分野の学生との交流」については80%以上、「専門分野以外の教員との出会い」「議論することに対する自信をつけること」については70%以上の修了生が「非常に良い」又は「良い」と回答している。一方で、「企業人との交流」「インターンシップの機会」、「留学の機会」、「他大学の学生との交流」については「機会がなかった」や「どちらとも言えない」と回答した修了生も一定数見られる。

④プログラムで受けた指導

「研究室ローテーション」、「産学共同研究の場への参画」、「企業、政府機関などの学外者からの指導、助言」では、指導を「受けていない」と回答した修了生も一定数見られるが、指導を受けた修了生の回答を見ると、どの取組についても「有効」、「ある程度有効」の合計が85%以上で有効性に対する評価は高くなっている。

⑤環境の整備と有効性

「学生のみでプロジェクト等を企画・運営する機会」について整備が「不十分」、有効性についても「有効でない」「あまり有効ではない」という回答も見られるものの、全ての項目において「十分にされていた」、「ある程度されていた」、また「有効」「ある程度有効」との評価が多数を占めている。

⑥経験の有無と有効性

国内外の研修・インターンシップ、留学、その他学外活動のほぼ全項目において、「参加しなかった」と回答した修了生の数が「参加した」と回答した修了生を上回っているが、実際に活動に参加した修了生は、いずれの項目でも90%以上が「有効」又は「ある程度有効」と回答している。

⑦身に付いた能力

修了後に変化した能力について、ほとんどの項目において、「向上した」、又は「ある程度向上した」と回答した修了生が80%を超えている。一方で、「チームのマネージメント力」、「企画立案、関係者との調整、統率する能力」については、「変化なし」と回答した修了生も少なからず見られる。

⑧プログラムの効果・負担

「所属研究室において、自分の専門的な研究を進めて、業績を上げられると考えている」「このプログラムによって自身の研究に新たな示唆・知見が得られた」、については、85%以上が「非常に思う」又は「そう思う」と回答している。「所属研究室での指導と、このプログラムでの指導が過大な負担にならないように考慮されている」かどうかについても約80%の修了生が肯定的に回答しているが、「修了後の進路に不安がない」かどうかについては肯定的な回答が65%程度となっており、修了生によってややばらつきがある。

⑨修了後の進路

大学院入学時、修了時、アンケート回答時点、いずれも「民間企業に就職（研究者として）」、「大学（海外を含む）に研究者として就職」、「ポスドク（博士研究員）」、を選択した修了生が多く、大学院入学時、修了時、アンケート回答時点で全体的な傾向に大きな差は見られない。修了後の進路については、「民間企業に就職（研究者として）」が最多となり、次いで「ポスドク（博士研究員）」「大学（海外を含む）に研究者として就職」が続いている。修了時、アンケート回答時点の両方で、これら3つの回答の合計は全体の約75%となる。

⑩修了生の属性

男性が約75%、女性が約23%となっている。76%が同じ大学の卒業生であるが、他の大学の学部の卒業生（18%）をはじめ留学生・社会人経験者等も一定数存在する。大学院入学後2年目以降に参加した修了生も約70%見られた。また、約69%の指導教員がプログラムに所属している。

⑪プログラム情報の獲得方法

プログラムをどのようにして知ったかについては、約55%が「大学で行われた説明会・シンポジウム等」を選択しており、「プログラム担当者の教員」（約48%）を挙げた修了生も半数弱いる。「学内の

友人・知人、「プログラム担当者以外の教員」や、ホームページ・リーフレット等の広報媒体からプログラムを知ったという修了生も一定数見られる。